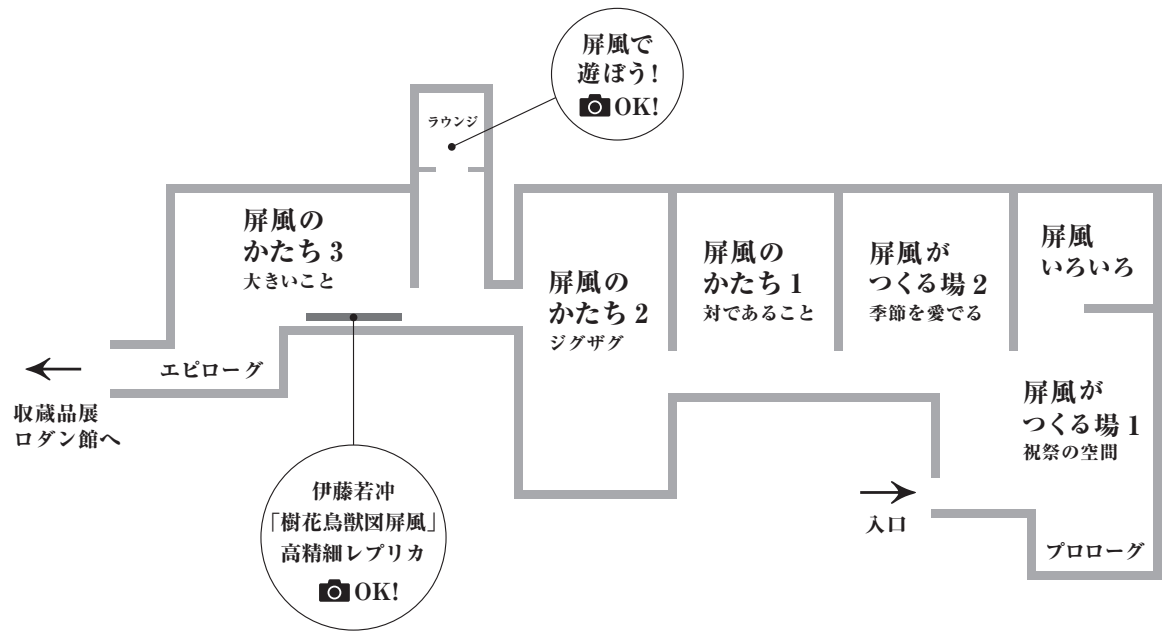


2019
4.2 [火]
→
5.6 [月・祝]

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

屏風爛漫

Byōbu Ranman
ひらく、ひろがる、つつみこむ



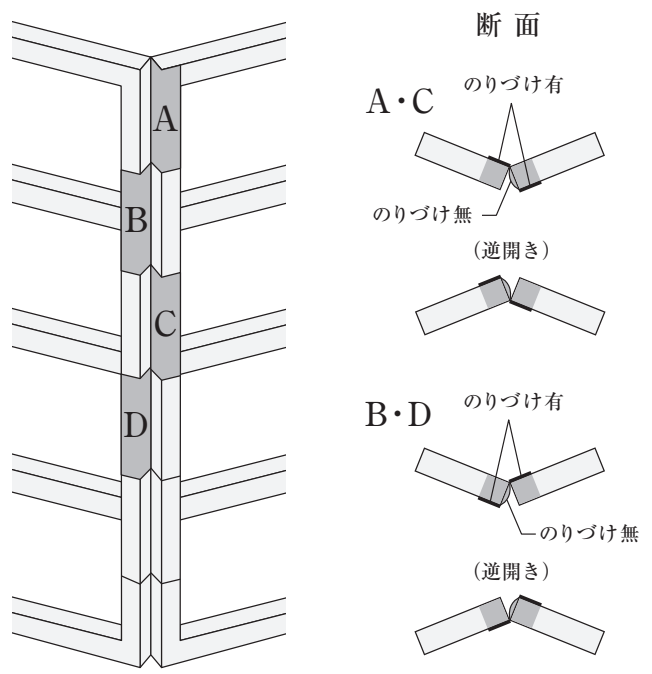
【屏風を知る】

屏風が曲げられるのは、
どういう仕組み？

屏風はパネル状のものを横に何枚かつなげて作られていて、パネルのつなぎ目は動かせるようになっていきます。広げたり折りたたんだりして形を変えられる、ということは屏風の最も重要な特徴ですが、この構造の勘所は、つなげ方にあります。

古い時代の屏風は、帯状の皮や布を、屏風の長さと同じ長さにつくり、隣り合うパネル同士にそれを取り付けてつなげていたそうです。この場合、構造上、パネル一枚（これを一扇といいます）ずつに縁取りを必要としました。また、山折り、谷折りのどちらか決まった一方にしか曲げることができませんでした。やがて、紙による蝶番というきわめて画期的なつなぎ方が発明されて、一扇ごとの縁取りは不要になりました。また、一つのつなぎ目で山折り・谷折りの両方が可能となり、屏風は調度品としてさらに使い勝手の良いものになりました。

紙の蝶番の構造



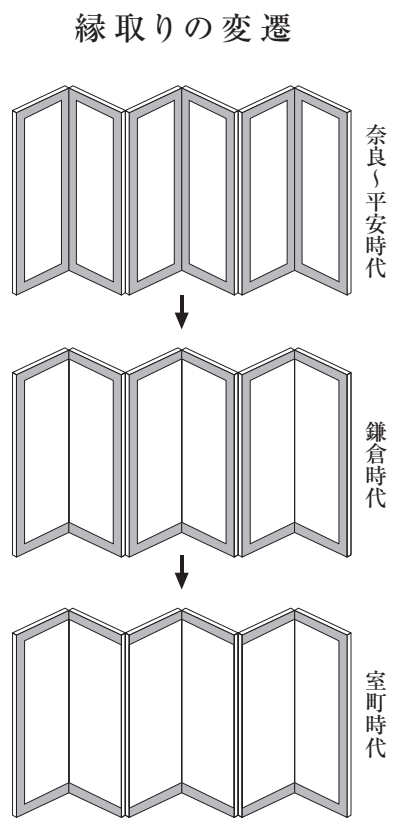
『日本屏風絵集成』第一巻 講談社 一九八一年より作成

山折りと谷折りの両方ができる？

紙の蝶番でつなげられた屏風は、基本的に山折り・谷折りの両方ができる構造になっています。右下の図のように、上下数段に分けて、互い違いに貼り付けた和紙でつながっており、山折り・谷折りは同じ条件で可能です。ただし、ある程度古い屏風などは折り癖もありますし、素材の劣化も考えられ、安易に両側に折るのは避けた方がよいです。

縁取りって？

現在私たちが見る屏風の多くは、パネル六枚つなぎ（これを六曲といいます）で、六曲分の画面は、四周を美しい裂で囲まれ、縁がつけられています。これを縁取りといいます。古く時代の屏風は、パネル一扇ごとに縁取りがなされていました。鎌倉時代・十三世紀に、折りたたんだときに向かい合う二扇ずつをまとめて縁取る二扇縁取りが登場し、室町時代・十四世紀末には、いま見るような六扇一括縁取りが現れました。六扇一括縁取りを可能にするには、紙の蝶番の発明が前提となります。しかし、紙の蝶番の発明が即ち、六扇一括縁取りの誕生につながったわけではないようです。六曲全体をひと続きの画面とする図様が求められるようになったからこそ、パネル間の境目をなくした六扇一括縁取りが成立したものと推測されています。画面の形と、描かれる絵の形とは、互いに深く関わり合っているのです。大画面を獲得した屏風には、その形を生かした屏風絵が描かれ、調度品として、また絵画として、さらに魅力的なものになりました。



なお、鎌倉時代までの屏風はほとんど現存しておらず、制作された当時のままの表装のものも無い。こうしたことを実際の屏風で検証することは不可能です。そのため、絵巻などに描かれた絵の中の屏風の姿を手掛かりにして、考察が進められています。

折り曲げる絵ってなんだか変。 平らにした方が見やすいのでは？

絵が折れ曲がっているというのは、現代の私たちにとって確かに変な状態かもしれませんが、美術館博物館でも、平らにした状態で展示される場合があります。ただ、一直線の真つ平らにすると屏風は自立できないため、調度品として用いる場合は、通常どこかを折り曲げることになります。展示室で見えるような規則的なジグザグの形が正しいわけではなく、場の状況に応じていろいろな形に折り曲げて立てられました。画面が折れ曲がる、ということは、屏風絵を描く側も当然念頭に置いていたことでしょう。屏風の立て方、見方に正解があるわけではありませんが、折り曲げることを前提として作られた画面であることは、踏まえておいた方がよさそうです。実際、平らにしたときと折り曲げたときとは、絵の見え方は変わってきます。開き加減によって変化する画面を楽しむことは、屏風を見る喜びのひとつではないでしょうか。

屏風は大きくて重そう...

最も一般的な六曲の本間屏風（高さ一六〇cm程度）を前提としてのことですが、通常は大人が一人で持ち上げて運ぶことができる程度の重さです。六曲であれば、厚みは片手で掴める程度ですので、両側からしっかりと持つこともできます。調度品としての用途を考えると、このことは屏風の大変利便な点です。ただし、屏風箱に収納されている場合、これを一人で取り扱うのは難しいため、人手が必要になります。とはいえ、作品によって重さはまちまちです。今回の出品作でいうと、池上秀敏「夏より秋」六曲一又は、本紙の縦寸が一七七・四cmと通常の屏風よりも背が高く、縁木には立派な飾り金具もついているため、一人で持ち運ぶことはできないほどの重量です（取り扱う人にもよりますが）。この作品は大正十一年の帝展出品作で、はじめから調度品としての使い方は想定されておらず、展示会場での展示効果が第一に考えられたため、こうした仕様になったのでしょう。「屏風爛漫」展では、桃山から昭和までの作品をご覧いただきますが、近代以降の社会状況や生活スタイルの変化は、屏風の姿にも変化をもたらしました。

〈主要参考文献〉武田恒夫『近世初期障屏画の研究』吉川弘文館 一九八三年／榎原悟『美術館へ行こう 屏風絵の景色を歩く』新潮社 一九九七年／安村敏信『ワイドで楽しむ 奇想の屏風絵』東京美術 二〇一〇年／奥平俊六『屏風をひらくとき』トコからでも読める日本絵画史入門 大阪大学出版会 二〇一四年／榎原悟『屏風と日本人』敬文舎 二〇一八年